

# 全国患者図書サービス連絡会会報

Vol.25 No.2  
(通巻 No.84)  
December 2019

## 目 次

### [投稿]

- 患者図書室ボランティアとして  
神奈川県立こども医療センターボランティアグループ・オレンジクラブ  
村田慶二郎……………1

### [講演会報告]

- 講演会「患者図書サービスの現在と将来：20年間の振り返りと展望」に寄せて  
……………4
- 患者図書サービスの歴史 聖隷佐倉市民病院図書室 山口直比古……………6
- 日本図書館協会健康情報委員会の活動について  
日本図書館協会健康情報委員会（浦安市立図書館） 柚木 聖……………10
- 特定非営利活動法人日本医学図書館協会医療・健康情報委員会  
これまでの活動と今後の取り組み  
日本医学図書館協会医療・健康情報委員会（東邦大学医学メディアセンター）  
岡田 光世……………14
- 日本病院ライブラリー協会における患者医療図書サービス支援  
日本病院ライブラリー協会会長 大沼由紀子……………19
- 患者図書室の歩み —患者図書室の20年間と残された課題—  
健康情報棚プロジェクト代表 石井 保志……………26
- 全国患者図書サービス連絡会パネル講演会報告 —持続可能な活動を模索して—  
全国患者図書サービス連絡会 磯野 威……………28

### [参加記]

- 全国患者図書サービス連絡会講演会参加記  
東京医科大学図書館 高畑亜紗美……………30

### [患者図書室訪問]

- 新潟県立がんセンター「からだのとしょかん」と「あかね文庫」  
青梅市立総合病院図書室 家田 史子……………32

- [投稿規定] ………………36

- [編集後記] ………………36

<投稿>

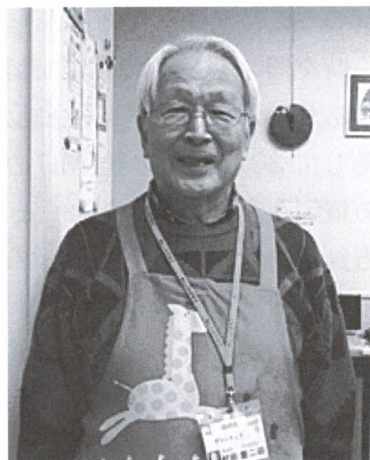
## 患者図書室ボランティアとして

神奈川県立こども医療センターボランティアグループ・オレンジクラブ

村田 慶二郎

2008年3月、私は神奈川県立こども医療センターに組織されていたボランティアグループ、オレンジクラブに加わり、外来図書室（現在は患者図書室）のボランティアとしての活動を始めました。

神奈川県立こども医療センター（以下、KCMC）は、公立では国内で二番目の小児総合医療施設として1970年に設置され、図書室も同時期に開設されましたが、外来患者とその家族を対象にした外来図書室は、新棟完成後の2006年に、「患者さんとその家族に対して医療情報を提供する」という目的で、周産期棟への通路の近くに30㎡の小部屋で始まりました。



私が病院ボランティアを志したのは、患者として通院していたある病院でIT化がすすめられており、それに対応できない人が再来受付の前で茫然とたたずんでいる姿を見受けたことによります。医療全般のIT化により高度医療を容易に受けられる時勢ですが、その時流に取り残されているお年寄りが多々存在するという現実からです。

そこで、病院の再来受付機のボランティアとして、そのような人の手助けを数年にわたって行ってきましたが、当初の高揚した気分も薄れてきて物足りない気分になってきた時に、県の広報にKCMCのボランティア募集の記事を見つけ、KCMCが自宅から谷を隔てた徒歩圏内にあるところからさっそく研修を受けました。その時は母親の介護の手助けをしていてすぐには加われませんでした。手が離れて再びKCMCを訪れボランティア登録を行いました。そして、ボランティア・コーディネーターから、外来図書室のボランティアを紹介されました。私は現役時代には製薬会社の研究及び特許部門に属して、常に医療情報に接しており、本好きでもあるところから躊躇するところなく外来図書室に参りました。

その当時の外来図書室には、図書ボランティアとNPO 難病ネットワークから派遣されているピアサポートとがテーブルを構え、絵本類と医学書を取めたそれぞれの小さな本棚と大きなテーブルがおかれ、子どもの興味を引く玩具類など（どれも寄贈品）がいろいろあり、診察時間待ちのお子さんが玩具や絵本で賑やかに過ごしておりました。ボランティアの業務もお子さんとの遊び相手が主で、夏休み冬休み等の長期休みの期間中は子どもさんでごった返しておりました。当時のオレンジクラブのホームページには、「小さなスペースですが、お子様と一緒にホッとできるそんな場所です。誰でも気軽にのぞいてみてください」と記載されております。

そんな外来図書室が大きな変化を遂げたのは、司書が図書のOA化の課題を残しながら2013年に退職し、後任の司書がその解決に積極的に取り組んだ時です。医師・看護師の要望にそって図書室のIT化を推進し、医学・看護系図書のオンライン検索を可能にするとともに貸出を開始しました。このことにより図書室は県の病院機構より表彰されました。外来図書室も一日貸し出しが始められ、ボランティアにもPCに対するある程度の対応が求められましたが、ボランティアの中には子どもとの接点を持つことが第一であるとの理解のうえに活動している人もあり、違和感を抱いた人は去ってゆきました。

時を同じくしてKCMCが小児がんの拠点病院として全国15施設の一つに選ばれたこともあり、外来図書室も子どもが読めるがんに関する図書を揃える必要がありました。そして2015年にはKCMCの方針として、外来図書室は「患者とそのファミリーが求める情報と資料の提供を第一として、絵本・玩具による子どもへの対応は第二とする」との方針が出され、大きなテーブルと賑やかな遊びの中心だった玩具類は整形外科受付ちかくのプレイ・コーナーに移され、空いたスペースにはAYA世代のお子さんに対応して学習机が3台置かれ、病気に関連した図書も増えました。

この結果、外来図書室から賑やかな子どもの歓声はなくなり静かな学習室になりました。そして、図書室には医療情報を求めて来られる方が増えて、ボランティアもこれに対応して希望の図書を検索する、さらに高度な依頼には司書を紹介する、依頼内容によっては同室の「ピアサポート」グループにつなげるなどを見極めるスキルも必要になりました。

2016年には外来図書室の名称が患者図書室に変更され、また、入院・外来を問わず図書カードによる図書の貸し出しが始まりました。図書の貸し出しはPCを介して行うためボランティアにはその操作のためのスキルが必要になりました。患者とその家族に対する図書の貸出は順調に推移して利用者を増やしております。このように私の図書ボランティアとして活動はKCMCの変革の波を受けて、大げさに言えば木の葉のごとく翻弄されてきましたが、前職の経験から特に臆することなく立ち向かうことができ、気が付けば十有余年を過ごしてきました。

今、KCMCはクリスマスの飾りに溢れています。いろいろな色合いの大きささまざまなトナカイがセンター内を飛び跳ねております。一体何頭いるのでしょうか。これは30余りあるボランティアグループの一つ、手芸クラブの労作です。そして、年末にはすぐさま正月飾りに大変身し、来春には子どもたちを獅子舞いが出迎えてくれます。その獅子の数は、16頭、いやもっといます。図書室前の廊下にはオレンジクラブ員の手作りの品がワゴンで販売されていて、その収益がすくなくならずボランティア活動の手助けになっています。

KCMCのボランティアとして、様々な出会いと別れを重ねてきました。図書ボランティアの仲間では、ストレッチャーに身を委ねながら子どもたちに明るく声をかけていた筋ジストロフィーの若かったM君、今は瀬戸内で静かに眠られています。ダウン症のMさんは、屈託のない笑顔を振りまいていまも元気です。

前述のようにKCMCには350人あまりの仲間がおります。様々なエプロンがセンター

内を闊歩しております。一堂に会することは不可能ですが、年に2回開催されるバザーはそのチャンスの時です。忘れておりましたが、もう一人いや一頭かな、国内最初のファシリティー・ドッグを卒業した「ベイリー君」もです。

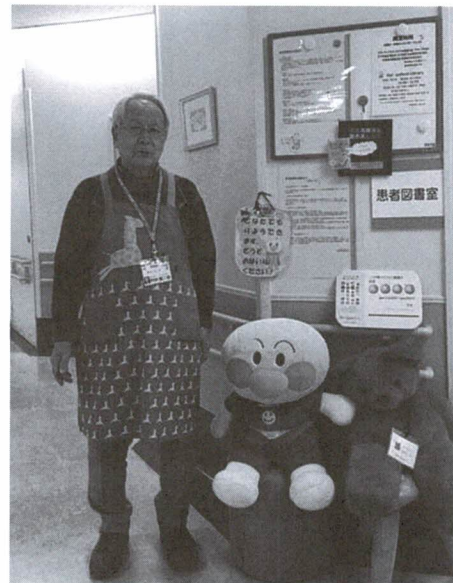
私は図書室と共に外来のボランティアとしてもKCMCの玄関に立ち、子どもたちとその家族に笑顔での出迎えを行っております。子どもたちは、家族の方の一刻でも早く受付を済ませたい気持ちにお構いなく、オリガミのコーナーに駆け寄り、ボランティアが持ち寄った色々なオリガミ作品を手に入れようと夢中です。

作品は全国の方からも送られてきます。数百を超えて送られてきた指輪（オリガミの）が届いた時には「泥棒に注意」の張り紙がつけられて大笑いでした。十二支をオリガミで巧みに作ったYさんの優しい笑顔と言葉はいつまでも忘れません。ボランティアから仕事に復帰されたTさんは毎週、時には夫君の手伝いを受けながらエンピツのオリガミを送ってきてくれます。もう5年以上になります。見ただけで、作者が分かる腕時計のオリガミは介護のために新潟に移られたKさんから。一枚のオリガミから一体、何羽のつるが折られているのか、と子どもに渡すのが惜しくなるような芸術的なオリガミ。季節・季節の絵が丁寧に描かれたトトロ、それはそれは大勢の方々の手になるオリガミに子どもたちに代って感謝です。2カ所の病院で週2回の十有余年にわたるボランティア活動は、私にとって今や生活の中心です。

図書室で席をおなじくするもう一つのボランティア、「ピアサポート」の人たち、彼らは東京にある難病ネットワークの人たちです。彼らはかつて、いや中には今も厳しい状態に置かれた子どもを持っておられる人たちです。厳しさを乗り越えてきた自らの体験を「ピア」として語ることによって、日々不安を抱えながらKCMCを訪れている若い親御さんの悩みの解消の手伝いをされておられますが、この人たちに会うことは私にとっても楽しみです。お茶を飲みながらの会話が弾みます。ローテーションが決まっていないので、今日はどなたに会えるのかとその到着を待っています。

小6から社会人になって去っていったT君、重い障害を抱えながらいつも強気をとって、緑茶が大好きで診察日の度に図書室を覗いてくれました。彼はITの技術を生かして企業で働きだしましたが、元気にやっているのかと案じております。

かつては徒歩圏内であったKCMCも今では優待パスのお世話になっておりますが、このさき、いつまでボランティアを続けられますか。



<全国患者図書サービス連絡会パネル講演会報告>

## 講演会「患者図書サービスの現在と将来： 20年間の振り返りと展望」に寄せて

2019年12月15日（日）、患者図書サービスについて意見交換する場として、関連諸団体をお願いして講演会を開催しました。当日は、講師および参加の皆様のおかげをもちまして大変有意義な意見交換の場となりました。私たち全国患者図書サービス連絡会の今後の活動について、貴重なサジェスチョンをいただいた良い機会ともなりました。その様子を会員の皆様と共有したいと思い、当日の開催案内とプログラム、そして講演者をお願いして講演後にご執筆いただいた報告書、参加者をお願いしてご執筆いただいた参加記を掲載します。



プログラム第1部の会場の様子



第3部パネルディスカッションでの和やかなひとコマ。  
左から山口直比古さん、柚木聖さん、岡田光世さん、大沼由紀子さん、石井保志さん、  
当連絡会の磯野威。

## 全国患者図書サービス連絡会講演会

### 「患者図書サービスの現在と将来：20年間の振り返りと展望」

日 時：2019年12月15日（日）13：30～17：00

会 場：東邦大学大森キャンパス 医学部3号館（地下1階）第3講義室

患者図書サービスが2000年代に大きく前進した理由のひとつに、諸団体による10年以上の活動の支えがあります。しかし、患者さんのニーズの多様性ととも、活動の担い手の世代交代も進んでいます。そこで、諸団体が一堂に会して日本の患者図書サービスの歴史と展望を学び、意見交換する場を設けることにしました。患者図書室を学ぶ絶好の機会です。

#### プログラム

##### 【第1部】 患者図書サービスの歴史

山口直比古氏（聖隷佐倉市民病院図書室、NPO 日本医学図書館協会会友）

##### 【第2部】 各団体の活動歴と今後

1. 柚木 聖氏（日本図書館協会健康情報委員会委員長）
2. 岡田 光世氏（日本医学図書館協会 医療健康情報委員会委員長）
3. 大沼由紀子氏（日本病院ライブラリー協会会長）
4. 石井 保志氏（健康情報棚プロジェクト代表）
5. 磯野 威氏（全国患者図書サービス連絡会会長代理）

##### 【第3部】 パネルディスカッション「患者図書サービスの将来」

ファシリテーター：山口直比古氏（聖隷佐倉市民病院図書室）

※講演者・時間・登壇順序は変更する場合があります。

#### （開催概要）

日時：2019年12月15日（日）13:30～17:00 ※開場は13:00です。

会場：東邦大学大森キャンパス（東京都大田区） 医学部3号館（地下1階）第3講義室  
<https://www.toho-u.ac.jp/campuslife/caminfo/index.html>

交通：JR 京浜東北線 蒲田駅下車、東口2番バス乗り場から「大森駅」行きに乗車。

「東邦大学」下車。[https://www.toho-u.ac.jp/accessmap/omori\\_campus.html](https://www.toho-u.ac.jp/accessmap/omori_campus.html)

参加費：会員：1000円、非会員：1500円 学生：500円

参加申込方法：1) 氏名、2) 所属、3) e-mail アドレス、4) 懇親会参加(有無)を  
12/12（木）までにお知らせ下さい。

以降は直接会場へお越しください。

主催：全国患者図書サービス連絡会 <http://kanjatoshio.jp/index.html>

## <講演会報告>

# 患者図書サービスの歴史

聖隷佐倉市民病院図書室

山口 直比古

## 1. はじめに

— 前史：癒しとしての読書と治療としての読書 —

本と呼ばれるようなものが登場したのは、紀元前2000年の古代バビロニアのニップール遺跡で発掘された粘土板にまで遡ることができる。粘土板に記された文字がパピルスと呼ばれる植物の茎を干し広げた紙のようなものに記録されたものは、紀元前250年頃のアレクサンドリア図書館に残っている。しかしながら、これはまだ宮廷や僧侶などごく一部の人々しか利用することができなかった。病を持つ人々が本と出会う患者図書館は、2世紀頃の小アジアの古都パーチモンに存在していたといわれている。



その後、紙がパピルスにとって代わるが、そうした中で、1271年に建てられたカイロのアル・マンスール病院には、司祭が患者にコーランを読ませて回復の促進を図ったという。さらに中世のヨーロッパでは、修道院において、聖書による癒しが提供されていたという<sup>1)</sup>。

時代は下って18世紀末から19世紀にかけては、英米で病院に患者図書室が設置されていった。特に第一次世界大戦時には、赤十字社などによる傷病兵への読書環境の提供（戦時図書館）がなされていた。中世の宗教書から娯楽書の提供への転換である。1933年に米国病院協会患者図書館委員会が設立されるなど、二つの世界大戦の間に患者図書室は広がりを見せることになる。ここまでは癒しとしての読書が中心であった。このことは現在でも変わりはない。

第二次世界大戦後には、精神科領域における治療の一部としての読書が推奨され、読書療法（Bibliotherapy）と呼ばれている。治療を目的とした精神衛生のために、治療者が選んだ小説や詩集を読んだり、精神医学的治療の補助として、図書、新聞・雑誌の記事やパンフレットなどを利用することである。しかしながらここではまだ患者図書室は登場しない。ここで行われていたのは治療としての読書である。

## 2. 患者の知る権利

現在に繋がる「患者の知る権利を保障するための情報源」としての患者図書館の始まりは、1960年代後半の米国における消費者運動にその起源をたどることができる。その頃米国はベトナム戦争の一方の当事者であったが、その反戦運動が、黒人などの人種差別解消を求める公民権運動へ発展し、さらに消費者運動へ広がってゆく。その消費者運動の中

に公害などによる健康被害や医療事故などに対する市民の知る権利を求める声が含まれていた。そうした中で1973年に米国病院協会により「患者の権利章典」が作られた。この宣言の中では「患者は、自分の診断・治療・予後について完全な新しい情報を、自分に十分理解できる言葉で伝えられる権利がある」と謳われている。ここに初めて「患者の知る権利」が宣言された。同様に1981年の患者の権利に関する世界医師会リスボン宣言においても、患者の良質な医療を受ける権利と同等に、知る権利と自己決定の権利が保障されるべきであるとしている。

これらの宣言は、1980年代にインフォームド・コンセントとして医療の中に実現されてゆく。さらに、患者は、医療者の説明を理解し了解するばかりではなく、治療の方法等について自分で決定する、という考え方が広まってくる。医療者と患者が協働して治療方針を決めるシェアード・デシジョン・メイキングという考え方である。

### 3. 情報の非対称性

インフォームド・コンセントは確かに医療者から患者への説明を義務付けた。特に日本においては2007年の第5次医療法の改訂により、医療者から患者への説明責任を明示している。しかしながら、患者の側の受け止めはどのようなものであったろうか。

非対称性という言葉は、元来経済学で用いられている用語で、市場における取引者間での情報に格差が生じている事実を表現したものである。近年、医学・医療の分野でも、治療者である医師と患者である市民との間に、病気や治療に関する情報の量や質に差があり、そのことが患者の自己決定や医療への参加の障壁となっている現状を「非対称性」という言葉で表現されるようになった。とりわけ日本においては、父権主義（パターナリズム）と呼ばれる、医療者主導型の医療が伝統的に存在していたこともあり、患者は自分の病気や治療について知る機会が少なく、それを受け入れてきたという経緯もある。そのため、情報の非対称性を完全に取り除くことは難しいとされている。

インフォームド・コンセントを受ける患者は、医療者の説明にどの程度満足しているのだろうか。少し古いが、2001年の我々の調査では「病気や健康についての情報要求は高いがその入手方法については、医師に尋ねる以外に適切な方法が無く、得られる情報にも十分には満足していない。」との結論に達している<sup>2)</sup>。患者自身の知りたいことを尋ねられる最も信頼のおける対象は主治医であるが、現状としては尋ねにくく、説明を受けてもわかりにくい、ということである。

一方で、病院は患者の欲しい情報を的確に提供しているのであるだろうか。坂本等の調査によると、患者用図書室・情報室に関する情報を待合室などで掲示しているのが89病院中14病院、ホームページで案内しているのが89病院中6病院であったと報告している<sup>3)</sup>。すなわち、患者の側の情報ニーズはあるが、病院ではそれをうまく受け取れていないということであろう。同時に同報告は「院内の患者図書館の整備状況はまだまだであるが、患者図書館の充実が求められる。市民の必要な情報を調べることができることは、患者、医師とのコミュニケーション力、対話力の基礎を身につける場として有効である。」と結論づけている。



#### 4. 病院患者図書室の役割と日本での展開

患者図書室の最も大きな役割は、体や病気、その治療法、予後（退院後の生活や長い人生を過ごす上での留意点）などの情報を提供することにより、患者の知る権利を保障し、情報の面から患者の自己決定を支援することである。その具体的な内容としては、医学書やパンフレットなどを提供することにより、医療者との情報のギャップを解消するための手助けをすることである。患者が医療者の説明を受けた後、その理解を助けたり、より深めるということである。多くの医療者は、病名を含めて医学専門用語を交えて患者に説明するが、患者にとっては理解できないことも多い。特に病名を正確に記憶することは、医療者が想像する以上に難しい。ましてや横文字で表現される薬剤や治療の手技などにおいては、紙にでも書いて説明を受けなければ、言葉があやふやなままで受け答えをしてしまいがちになる。

日本において、病院の中で患者さん向けに医学・健康情報を提供するための場としての病院患者図書館が最初に開設されたのは1977年の京都南病院であるとされている。もちろんそれ以前にも、主として小児病棟などで入院児などを対象とした巡回文庫や読み聞かせなどは、多くのボランティアにより行われてきた<sup>4)</sup>。そうした中で、専任の司書を置いた図書館サービスを行った先駆けとなったのが京都南病院である。現在では専任の司書を置いた本格的な医学・健康情報提供のための施設も増えた。その代表的なものとしては、2002年設立の静岡がんセンター「あすなる図書館」、2003年設立の東京女子医科大学「からだ情報館」、2005年設立の東邦大学医療センター大森病院「からだのとしよしつ」などがある。

そうした患者図書室開設の背景には、1996年より行われている病院機能評価における評価項目としての患者さんへの情報提供の明記や、2006年のがん対策基本法による国立がん研究センターでのがん対策情報センターの設置、さらに2007年の医療法第5次改訂による医療者の説明責任の明記などがある。

#### 5. おわりに — 将来へ向け

病気を抱える患者さんの立場は、インフォームド・コンセントにより説明を受けるという立場から、今日ではシェアード・デシジョン・メイキングと呼ばれる、医療者と患者の協働により患者自身が治療方針などを決定するという方向に向かいつつある。そうした中で、患者の側の情報ニーズは重要かつ緊急なものとなっている。患者さんが必要とする情報を的確に提供する場としての「患者図書館」の役割は益々重要なものとなっている。

また、診療ガイドライン作成においては、患者自身がステークホルダーの一員として委員となり、作成委員会で患者としての意向を伝えるという役割も実現しつつある。患者の意向に関する社会的環境は、日々変化しつつある。従ってシェアード・デシジョン・メイキングのような新しい言葉や概念が次々と登場している（2020年より Decision Making, Shared という語が新たに MeSH に加わった）。それは医療における患者の立場が、医療を受けるという受動的な立場から、自分の受ける診療については医療者の説明を受け、治

療などの選択肢を提示されたうえで、自分で知識を得、自分で判断し、自分で決める、という方向に大きく動いていることと関わっている。そうした環境の変化に対応した患者図書室の役割を果たしてゆくことも必要であろう。

厚生労働省が進める地域包括ケアシステムでは、地域の中での住民の健康維持が重要なテーマである。その中で、地域にある大学図書館や公共図書館、さらには病院にある医療者向けの図書館などとの連携が重要となる。病院では用意できないような専門的な情報は大学の医学部図書館や病院図書館から提供を受けるし、公共図書館からは団体貸出で一般書などを提供していただくことができる。つまり、患者図書室の将来へ向けた課題は「連携」というキーワードで表現できる。地域の中での大学図書館、公共図書館との連携ばかりではなく、全国の患者図書室同志のつながりもまた密接なものとしてゆく必要がある。

そのために今できることを考えてゆきたい。

#### 参考文献

- 1) 菊池佑, 病院図書館の歴史, 菊池佑・菅原勲, 患者と図書館, 東京: 明窓社; 1983. p.1-45
- 2) 日本医学図書館協会ワーキンググループ, 一般市民への医学・医療情報需要調査 厚生科学研究費補助金21世紀型医療開拓推進研究事業 日本における RBM のためのデータベース構築および利用提供に関する調査研究 (主任研究者 丹後俊郎) 平成13年度総括・分担研究報告書, p7-15
- 3) 坂本憲枝, 医療情報の提供の仕組みから病院の姿勢を読み解く <https://www.cocokarada.jp/knowhow/erabi/information/index.html> [Accessed 2019.12.18]
- 4) 菊池佑, 日本の病院図書館, 菊池佑・菅原勲, 患者と図書館 東京: 明窓社; 1983.p.46-59

## <講演会報告>

# 日本図書館協会健康情報委員会の活動について

日本図書館協会健康情報委員会（浦安市立図書館）

柚 木 聖

## 1. 委員会設立の経緯

日本図書館協会健康情報委員会（以下、委員会）は、図書館における一般市民への医療・健康情報サービスの推進を目的に2004年に「健康情報研究委員会」として発足した。2008年からは現行の委員会名に変更している。

委員会設立のきっかけには、全国患者図書サービス連絡会（以下、連絡会）が関係している。少し長くなるが、以下のような経緯があった。

連絡会では、2001年に『患者さんへの図書サービスハンドブック』を刊行した。刊行後の役員会では、今後の活動計画について議題となったが、市民への医療や健康に関する情報提供サービスをテーマにした講演会を開催することが決定した。担当は当時同会の役員だった石井保志氏と筆者の職場の先輩だった小林順子だった。（後日、石井氏は健康情報棚プロジェクトの設立に携わることとなった）

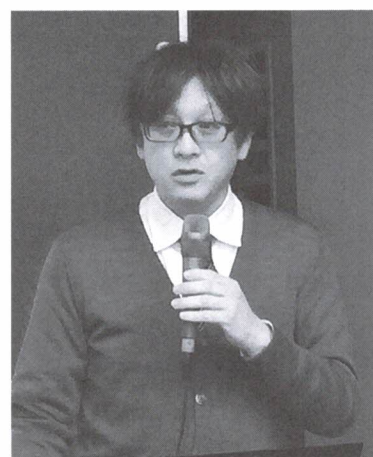
2002年に連絡会が浦安市立図書館において開催した講演会『医学情報サービスと図書館』は、約90名の参加があり主催者の予測を超えた盛況な会となったが、参加者に東京都立図書館（当時）の中山康子氏がおられた。

講演会終了後の懇親会の席で、小林と筆者は、初対面の中山氏から公共図書館の医療・健康情報サービスの勉強会を始めないかと持ち掛けられた。実は会場に浦安市立図書館を使用するにあたり、筆者は当時の館長だった常世田良氏から、一度限りの催しで終わらせないで継続的にこの課題に取り組んで欲しいと言われていた。そう言われてはいたものの、具体的な計画を持っていなかった筆者としては、たいへんありがたい申し出で、小林と3人で勉強会を立ち上げた。

少人数で細々と始めた勉強会だったが、翌年に転機が訪れる。常世田氏に呼び出された筆者は、日本図書館協会（以下、協会）で医療・健康情報の委員会を立ち上げたいので、勉強会のメンバーでやってみないかと打診された。

当時、常世田氏は日本の公共図書館にビジネス、医療、法律に関する情報提供サービスを推進する組織が必要と考えており、ビジネス関係ではすでに「ビジネス支援図書館推進協議会」が活動していたので、医療・健康情報関係の全国的な組織を設置したいという話だった。

同時期に筆者は、中山氏から「公共図書館の医学医療情報の提供に向けて」という氏が



作成した論文や、論文作成にあたり参照した海外の英語文献などを見せてもらっていた。論文の内容は海外や国内患者図書館の先進事例や公共図書館の情報ニーズを分析し、サービスの提供モデルを論じたもので、図書館現場の体制や医療機関や行政との連携などにも触れていた。氏の中では、この時点で医療健康情報サービスの基本的な構想がほぼ完成していたのである。そこで中山氏を中心に委員会設立申請書を作成し協会に提出した。

現在では、公共図書館での医療・健康情報サービスについて、ごく当たり前のこととして受け止められているが、当時の大半の図書館員の意識は違っていた。しかし、中山氏や上記の方たちは、新しい時代の図書館への見識があり、理想を実現するための実行力も持っておられた。これらの方々の図書館界への功績を知っていただきたく、書かせていただいた次第である。

## 2. 委員の構成

現在の委員数は、7名である。各委員の所属は公共図書館、公民館、大学図書館、研究所図書室、病院図書室など様々である。館種や所属の異なる委員が集まる組織であることがこの委員会の強みとなっている。互いに触発され、新たな視点を得ることも多々ある。

発足から15年が経過し、委員を退任した方、退職や異動をした委員会担当の協会職員も少なくない。常に人に恵まれてきた委員会で、どの方も委員会の活動に新たな価値を付け加え、医療・健康情報サービスの発展に寄与してくださった。

## 3. これまでの活動

委員会の活動については、「調査研究」、「学習機会の提供」、「他機関との連携」がある。なお、委員会の活動については協会の委員会ホームページでも公開をしている。(http://www.jla.or.jp/committees/kenko/tabid/266/Default.aspx) 以下、時間の経過に沿って紹介したい。

委員会の初年度の活動は、健康情報提供サービスの基本的な知識を得ることと今後の活動計画の制定を中心とした。

2004年6月に東京都立中央図書館が「医療情報コーナー」を設置し、日本の公共図書館の本格的な健康情報サービスの嚆矢となったが、国内の公共図書館の実践例は非常に乏しいというのが、当時の現状だった。このため委員会では、米国の健康情報提供サービスに関する基本文献である『The Public Librarian's Guide to Providing Consumer Health Information』<sup>1)</sup>を委員が分担で翻訳し講読した。

翻訳がある程度進んでからは、日本語版の出版を目指した。とはいえ、各委員は翻訳のプロではない。訳文のチェックでは当時、委員だった杉江典子氏にご尽力いただいた。出版に当たっては、野添篤毅氏に監訳者をお引き受けいただき、日本の読者が本書をより理解するために素晴らしいまえがきを頂戴した。おかげで、2007年に協会より『公共図書館のための消費者健康情報提供ガイド』として出版することができた。

翻訳作業と並行して、2005年に初めて研修会を開催した。講師は酒井由紀子氏にお願

いた。(連絡会関連では、公共図書館職員の筆者は、酒井氏を2004年に医学図書館協会が刊行した『医学・健康情報を市民へ』の著者として初めて知った。同書の共著者が、全国患者図書サービス連絡会でお世話になっていた奈良岡功氏と山室真知子氏だったため、拝読したことがきっかけだった)

翌2006年には、『みぢかな健康情報サービス 実践力をつける連続研修会』を主催した。この研修会では、毎回、鳥取県立図書館から図書館長を含む複数の職員の方々が参加して下さったことが印象深い。

鳥取県立図書館はこの年の6月に闘病記文庫を開設し、医療・健康情報サービスを開始した直後だった。先進的サービスから図書館界で注目され続けている同図書館には、その後も全国図書館大会の分科会発表者をお願いするなど、随分とお世話になった。

研修の6年後に、委員会は日本医学図書館協会が2012年に刊行した『やってみよう図書館での医療・健康情報サービス』の元となる研修受託事業に協力した。その機会を作ってくださったのも鳥取県立図書館だった。(その経緯は同書の前書きに記載がある)

調査研究では、2009年に「健康情報サービスの実態および『がんに関する冊子』の利用アンケート調査」、2014年に「公共図書館における健康・医療情報サービスの実施状況の調査」を実施した。

2008年に国立がん研究センターがん対策情報センターの方が協会に来訪されたので、健康情報委員会を紹介したという連絡を協会事務局長より受けた。あらためて担当者の方にお会いしたところ、一般市民へのがん情報提供のチャンネルとして各地域の公共図書館の可能性を検討したいとのことだった。このご相談を受けて、協会の施設会員である全国の公共図書館に、がん対策情報センターの『がんの冊子』を送付し、後日アンケートを実施することになった。

アンケート調査について、図書館側からの発案と思われそうだが、実はがん対策情報センターからアプローチしていただいていたのである。担当の方々がどうして図書館の活用という発想に至ったのか、その着眼点の鋭さに驚いた記憶がある。

2014年のアンケート調査は日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)「アクション・リサーチによる公共図書館課題解決のデザイン」研究班と協働させていただいた。研究班には2009年のアンケート調査でお世話になったがん対策情報センターの方もおり、5年ぶりの協働となった。調査結果については上記の委員会ホームページに結果報告を掲載している。(「公共図書館における健康情報の実施状況の調査」報告について)

学習機会の提供では、協会が開催する全国図書館大会の分科会、委員会による研修会や先進図書館の見学会、講師派遣なども行ってきた。

2017年の第103回全国図書館大会では、特別シンポジウム『認知症と図書館を考える』を開催した。委員会では過去に担当したことのない大規模な分科会で、開催に当たっては、「超高齢社会と図書館研究会」会長の呑海沙織氏(筑波大学)に企画段階からお世話になった。

同シンポジウムの模様は、後日NHK Eテレ「TVシンポジウム」で放映された他、

DVDとして協会が貸出を行っている。

委員会の活動に当たっては、他の団体や機関との連携や協働は欠かせないものだった。ここまでお名前を書かせていただいた団体や個人の方だけではなく、認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ、日本医療政策機構、キャンサーリボンズなど様々な団体に講師派遣や共催・後援などの援助をしていただいた。これまで行ってきた事業には、委員会だけでは実現できなかったものが多々ある。感謝の念は尽きない。

#### 4. 今後の活動予定

2019年4月に、認知症バリアフリーの取り組みや認知症分野でのイノベーション創出に官民一体で取り組むことを目的に「認知症官民協議会」が設立された。約100の団体が参加するなか、協会も協議会に参加して情報収集に努めている。委員会は協議会の担当委員会としての役割を担うこととなった。

2019年12月には、ワーキンググループの実働的な組織として、「認知症バリアフリー図書館特別検討チーム」を立ち上げた。このチームについては、協会障害者サービス委員会と連名で設立をし、両委員会からメンバーを推薦した。

チームの本格的な活動はこれからとなるが、今後、健康情報委員会の活動にとっては、情報提供のバリアフリー化という新しい視点を得る機会となり得る。委員会では、認知症に限らず、医療・健康情報の収集や利用に障がいがある市民への情報提供について取り組みたいと考えている。今回の障害者サービス委員会との連携は、委員会の活動をより発展させるチャンスと期待している。

#### 引用文献

- 1) Kenyon A, Casini BP. The Public Librarian's Guide to Providing Consumer Health Information. American Library Association;2002

## <講演会報告>

# 特定非営利活動法人 日本医学図書館協会 医療・健康情報委員会 これまでの活動と今後の取り組み

日本医学図書館協会 医療・健康情報委員会（東邦大学医学メディアセンター）

岡田 光世

## I. はじめに

特定非営利活動法人日本医学図書館協会（以下、JMLA）「医療・健康情報委員会（以下、当委員会）」は2012年に発足した委員会である。前身は、JMLA 教育・研究委員会の下部組織である「健康情報サービス研修ワーキンググループ（以下、健康情報WG）」で、医療・健康情報サービスの提供について、おもに公共図書館向けに研修会の実施やテキストの出版などをおこなっていた。当委員会も発足後、同様の研修事業に取り組んできた。



健康情報WGと当委員会についての経緯とこれまでの活動、そして当委員会が2018年に見直した今後の活動計画について紹介する。なお、健康情報WG、当委員会の主な活動については、年表形式にして表1に示した。

## II. これまでの活動

### 1. 健康情報WG

#### 1) 発足の経緯

かつてJMLAでは、2004-2009年「中期目標」に「保健・医療関係の情報・知識へのアクセスの促進」を挙げ、「医療従事者のみならず、患者、その家族をも含めて情報提供する」ことを目指していた。

その後、「2010年度～2012年度中期重点事業（目標）」では「公共図書館（一般市民）向け健康情報研修を日本図書館協会（以下、JLA）等との連携のもとにおこなう」ことになった。このような背景のもと、2010年1月、鳥取県立図書館からの受託事業としてJLAと合同で研修会を実施した。これがきっかけとなり、2010年6月にJMLA教育・研究委員会の下部組織として健康情報WGが発足した。

健康情報WG発足と前後して、2008年にTRC（株式会社図書館流通センター）からの受託で公共図書館員向けの研修会を実施したことも、重要な布石としてあげられる。この研修会では準備期間が短かったこともあり、JMLA医学図書館員基礎研修会の講義内容を使用した。受講者のニーズに合わない内容だった。このときの反省から、公共図書館（一般市民向け）健康情報研修として開催するために、時間をかけて講義内容を検討し、講師

には、公共図書館の現状が分かる人、患者図書室・病院図書室担当者などから人選して、2010年の研修会を開催した。

WGメンバーには、JMLA 教育・研究委員会メンバーのほか、JLA 健康情報委員会メンバー、公共図書館、病院図書室、患者図書室からも参加した。任期は2010年6月～2012年5月までの2年間であった。

## 2) 活動内容

活動は研修会開催が中心だが、そのための研修プログラムを構築し、研修会で使用するテキストも作成した。

2010年は10月に「健康情報ワークショップ in 静岡」、12月にはJMLA 受託事業として、岐阜県公共図書館協議会職員研究集会「公共図書館における健康・医療情報サービス」を開催した。

2011年は11月に「大分県宇佐市民図書館研修会」、JMLA 受託事業として宮崎県立図書館研修会「図書館における医療・健康情報サービス提供のためのスキルアップ講座」を開催した。

2012年は研修内容をまとめたテキスト『やってみよう図書館での医療・健康情報サービス』を5月に出版した。

## 2. 当委員会

### 1) 発足の経緯

2012年、健康情報WGを教育・研究委員会から独立させる形で当委員会が発足した。委員会メンバーには、健康情報WGのメンバーが参加した。2名が委員会委員に、ほかは「医療・健康情報ワーキンググループ（以下、医療・健康WG）」メンバーとなった。

### 2) 活動内容

当委員会は、一般市民に医療および周辺情報を提供しているすべての図書館を対象に、研修会を開催することとした。そのほかサービス全般に係る支援、研修会の講師育成、地域のネットワーク形成支援も目的とした。2013年10月にはテキストの改訂版を出版した。同年同月には、全都道府県立図書館と、医療・健康情報サービスを実施していると当委員会が判断した公共図書館を対象にアンケート調査を実施した。調査の目的は、医療・健康情報サービスの実施状況、医療・健康情報提供のための研修ニーズを把握するためであった。これについてはすでに野中ら<sup>(1)</sup>が報告しているので省略する。

2014年2月には、委員会が開催する第1回研修会を実施した。この研修会では、健康情報WGが構築した研修プログラムに従って講義をおこなった。おもな参加者は、公共図書館、大学図書館、患者図書室などであった。

2015年11月の第2回研修会は、JLAとの協賛で開催した。この研修会では初心者向けにテキストに沿った内容の「基礎コース」と、第1回研修会修了者向けに講演・グループワークをおこなう「実践コース」とに分けた。また、当委員会の事業として講師の育成を挙げたことから「基礎コース」では、第1回研修会参加者に講師を依頼した。講師には、



当委員会で作成した「医療・健康情報サービス研修会の進め方」というマニュアルと、「講義スライドのひな形」を提供した。これは、研修会を受講者が各所属先で受講内容を再現するツールとして作成したものである。

2017年2月のフォローアップ研修は、第1・2回研修会受講者を対象とした研修会で、実際にサービスをやってみて、出てきた問題点や感想などを情報交換し、横のつながりを広めることを目的とした。

2018年は、1月に第3回研修会、9月に岐阜県図書館と岐阜大学主催の研修会講師を派遣した。

2019年は、1月と2月に埼玉県立久喜図書館主催の研修会に講師を派遣した。2月には第2回フォローアップ研修会も開催した。

### III. 今後の取り組み

#### 1. 公共図書館向け研修会の休止

2018年、委員、担当理事の交代を機に、JMLA 総務会も加わって事業を見直すことになった。これまでおもに公共図書館向けに実施してきた研修会について検討したところ、つぎのような課題が挙げられた。

- ・知識、スキルの伝達が難しい
- ・受講者が得た知識、スキルが職場内で共有されず、広がりもみられない
- ・当委員会、医療・健康WGの負担が大きい
- ・開催頻度、参加者数などの限界
- ・JMLA 自体、会員が減少しており、多くの委員会で委員が不足

JLA や国立国会図書館などが公共図書館向けの「医療・健康情報サービス」研修会を開催するようになってきており、公共図書館における医療・健康情報サービス研修環境は以前に比べ増えている。JMLA としても事業が増える一方で委員が不足していることから、公共図書館向け講習会開催は休止することとした。ただし、JMLA でないといけない内容については、個別に相談を受けることとした。

#### 2. 患者図書室への支援

当委員会事業検討の結果、今後はJMLA 会員館の患者図書室への支援を強化していくことになった。JMLA が目指すところは、誰もが必要とする医療・健康情報にアクセスできる社会を創造することである。このために、患者図書室への支援が重要と考えた。

大学などの医学図書館は、資料やサービスに大差はないと考えられるが、患者図書室は、資料、サービス、設備、管理運営面など施設ごとに大きな差がみられる。そこでまず、患者図書室の標準化を策定し、患者図書室を一般化することで社会機能のひとつとなることを目指す。患者図書室が社会機能の一つとなれば地域貢献に役立ち、病院としても運営上

必要な部署となる。その患者図書室の管理運営を医学図書館が担うことで、医学図書館の貢献、存在意義を高めることにつながると考えている。

また各地に質の高い、安定した患者図書室ができることでその地域の公共図書館への支援、連携が実現する。

### 3. 今後の活動

現在、当委員会では患者図書室サービスのレベルを一定に揃えるための「患者図書室指針（仮称）」の策定を検討している。策定にあたり、各施設の現状を把握するための視察も予定している。視察先の選択方法は、JMLA第89次会員統計から「10. 協力」の「患者図書室（コーナー）への関与」への回答内容を参考にした。「会員の関わる業務」欄のうち、「資料の選定」「利用者対応」「庶務・運営」に2つないし3つチェックを入れた館は、積極的に患者図書室に関わっていると推定し、視察の有力候補とする。

また、視察する際の確認項目を事前に決めてチェックリストを作成した。リスト項目は資料、サービス、庶務・運営、施設・設備と分けた。このチェックリストを活用して、今後、視察を実施していく予定である。

## IV. さいごに

今回、当委員会の活動を振り返ることができ、これまで委員会に関わってくださった方々の熱意と努力を改めて感じる事ができた。今後の活動の糧としていきたいと思う。

このような機会を与えていただいたことを、この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

## 参考文献

- 1) 野中沙矢香, 市川美智子, 牛澤典子, 平紀子. 公共図書館を対象とした医療・健康情報サービス研修についての調査報告. 医学図書館. 2014;61 (2):192-6
- 2) 牛澤典子, 市川美智子. 「図書館における医療・健康情報サービス提供のためのスキルアップ講座」実践報告. 医学図書館. 2010;57 (2):214-8
- 3) 牛澤典子, 市川美智子. JMLA 受託事業 健康情報サービス研修ワーキンググループ紹介. 医学図書館. 2010;57 (4):352-4
- 4) 市川美智子, 牛澤典子, 野中沙矢香, 平紀子. 医療・健康情報サービス委員会. 医学図書館. 2014;61 (2):130-2
- 5) 渡邊基史. 第2回医療・健康情報サービス研修会開催報告. 医学図書館. 2016;63 (2):192-6

表 1. 健康情報 WG・当委員会の活動歴

2008.9-11	TRCライブラリーアカデミー講座『「医療・健康情報サービス」の基礎を学ぶ』(全6回)
2010.1	鳥取県立図書館「図書館における医療・健康情報サービス提供のためのスキルアップ講座」
2010.6	健康情報サービス研修ワーキンググループ 発足
2010.10	「健康情報ワークショップ in 静岡」
2010.12	岐阜県公共図書館協議会職員研究集会「公共図書館における健康・医療情報サービス」
2011.11	「大分県宇佐市民図書館研修会」
2011.11	宮崎県立図書館研修会「図書館における医療・健康情報サービス提供のためのスキルアップ講座」
2012.5	『やってみよう図書館での医療・健康情報サービス』出版
2012.5	「やってみよう 図書館での医療・健康情報サービス～業務の基本を学ぶ・拡げる～」第83回特定非営利活動法人 日本医学図書館協会総会分科会
2012.6	医療・健康情報サービス委員会、医療・健康情報サービスWG 発足
2012.10	韓国医学図書館協議会第44回秋季シンポジウム「日本の病院や図書館における医療・健康情報サービス」基調講演
2013.5	「患者さんへの医療・健康情報の提供」第84回特定非営利活動法人 日本医学図書館協会総会分科会
2013.10	『やってみよう図書館での医療・健康情報サービス』改訂版出版
2013.10	医療・健康情報サービス研修に関する調査実施
2014.2	第1回医療・健康情報サービス研修会
2015.11	第2回医療・健康情報サービス研修会
2017.2	2016年度第1回医療・健康情報サービス研修会フォローアップ研修
2017.2	「やってみよう図書館での医療・健康情報サービス」第3版出版
2018.1	第3回医療・健康情報サービス研修会
2018.6	委員会事業見直し
2018.9	平成30年度岐阜県図書館・岐阜大学図書館研修会
2019.1-2	埼玉県立久喜図書館「健康・医療基礎研修会」
2019.2	第2回医療・健康情報サービス研修会フォローアップ研修

<講演会報告>

## 日本病院ライブラリー協会における患者医療図書サービス支援

日本病院ライブラリー協会会長

大沼 由紀子

### 1. はじめに

日本病院ライブラリー協会（以下、JHLA）は、日進月歩の医学医療界における病院図書室の向上・発展を目的とし、1976年3月に設立された。病院図書室の役割には、医療職に対し診療支援、教育支援、研究支援の3つの側面があり、それらを通じて患者とその家族と間接的に関わっていると考える。そのために、会員ひとりひとりの資質の向上、図書室または会員相互の緊密な協力体制を推進している。



### 2. 患者医療図書サービス支援事業発足の背景

医療を取り巻く環境は、患者中心の医療、説明と同意、患者の知る権利、治療法を選択できる自己決定権など、患者の基本的権利を尊重した医療が求められるようになった。それと同時に、患者自身の医療に対する関心の高まりも大きくなっている。しかし、治療において選択し、自己決定をするためには、医療情報を入手する環境整備が必要である。このような医療社会の変化は、従来からの病院図書室業務にも波及し、これまでの職員を対象とした医学医療情報サービスから、患者やその家族、一般市民をも視野に入れたサービスの提供が求められるようになり、病院内に患者図書室の必要性が高まった。

院内に設置する患者図書室の開設・管理・運営は、病院図書室担当者の役割であると考え、2001年より患者への医療情報サービスの関わり方を調査するための研究グループを発足した。

### 3. 患者図書サービスへのあゆみ

研究グループは、JHLAとしての患者図書サービスの基準作成につなげるため、JHLA会員を対象に患者図書サービス実態調査を行なった。調査期間は、2001年から2002年の2年間にわたり2回実施した<sup>1,2)</sup>。2003年には、調査研究で得たものをもとに、患者医療図書サービスの開設と運営の手引書となる「患者医療図書サービスマニュアル」の作成を開始し、2004年に「デスクマニュアルシリーズ 患者医療図書サービス -医療情報を中心とした患者図書室」を発行した(図1)<sup>3)</sup>。同年5月に研究グループを解散し、患者図書サービス支援事業を発足した<sup>4)</sup>。

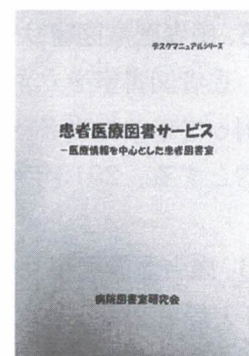


図1 マニュアル

#### 4. 患者医療図書サービスマニュアル

病院図書室担当者が患者医療図書サービスを実施していくうえで、どのようにかかわったらよいかの手引書である。各章共それぞれに詳しい説明と対応を記載し、図面や写真を多く取り入れた。初めて患者図書室に携わる担当者にも分かりやすい解説をつけている。構成は次のとおりである。

##### 第1章 患者医療図書サービスの意義と目的

患者の権利宣言、インフォームド・コンセントの流れ、サービスの意義と目的など患者への情報提供の必要性を解説。

##### 第2章 患者医療図書サービスの開設

これから患者医療図書サービスを開設したい担当者のために、開設の動機、準備委員会発足などの解説。

##### 第3章 施設と設備

開設する位置とスペース、揃えるべき設備と備品・患者医療図書サービスの内容と形態の解説。

##### 第4章 図書と資料

収集する資料の選書方針、分類や配架など図書室の基本業務とインターネットサイトの紹介。

##### 第5章 サービス

サービスの開始に際しての利用案内、注意事項、レファレンス、院内のサポート体制など、サービスを実施している図書室の各種参考資料の記載。

##### 第6章 管理と運営

サービス運営委員会などの組織を機能させ、継続的な予算の獲得、広報活動、資料の消毒・感染などの記載。

##### 第7章 教育と研修

サービスにかかわるスタッフの教育と研修・基本的な医療情報の知識の習得法と患者への接遇の仕方。ボランティアの募集と研修、患者と接する際の心得を記載。

付録「参考図書リスト」

#### 5. 患者医療図書サービス支援事業委員会の目的

患者図書室を立ち上げるための相談や、初めて業務に携わる担当者および実際の運営で困っている担当者への支援を行い、患者への医療情報提供の定着と成長を目指すことを目的とする。2019年現在の委員会メンバーは6名である。

#### 6. 患者医療図書サービス支援事業委員会の活動

##### 1) 患者図書室現状調査

JHLA 会員の患者図書室についての現状を知るためにアンケートを実施し、調査結果をJHLA 研修会で発表している。また、アンケート結果をもとにJHLA ホームページの「患

者図書室紹介」に掲載し、項目の変更などはその都度対応している。細かな変化についてすべてを把握できないため、現状調査を5年ごとに行なっている。

- ▷ 2004年 12月 第1回患者図書サービスについてのアンケート調査
- ▷ 2005年 5月 調査結果発表<sup>5)</sup>
- ▷ 2010年 12月 第2回患者医療図書サービスアンケート調査
- ▷ 2011年 5月 調査結果発表<sup>6)</sup>
- ▷ 2016年 5月 協会ホームページの「患者図書室紹介」に掲載している患者図書室へ現状調査と情報更新

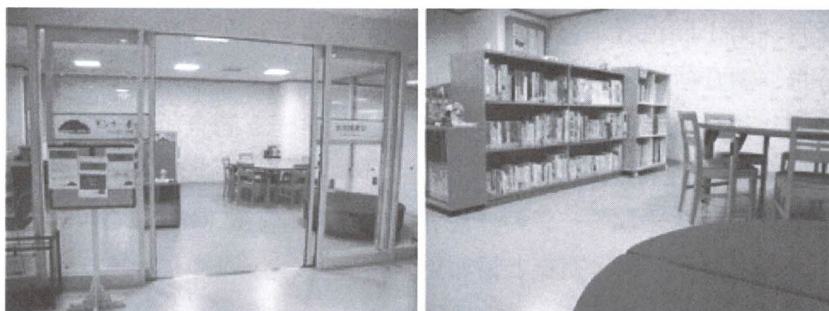
## 2) 患者図書室紹介

会員施設で運営されている患者図書室をJHLAホームページ(図2)で紹介している<sup>7)</sup>。患者図書室の紹介ページ(図3)は、患者図書室名、形態、開室日時、提供場所、インターネット利用、資料の複写、貸出について掲載。利用形態については、マニュアルに詳細があるが、独立型、公開型、併設型、支援室併設型、開設型、巡回型としている



図2 JHLA ホームページ (https://jhla.jp/)

● 日立製作所 日立総合病院 <茨城県>



患者図書室名	モンキーボード
形態	独立型
開室日時	月～金(休診日を除く) 9:30～14:00
提供場所	本館1階 採血検査待合室隣
インターネット利用	可
資料の複写	可

図3 患者図書室紹介 (日立総合病院 患者図書室)

### 3) 参考図書リスト作成


JHLA 会員が運営している患者図書室と患者医療図書サービス支援事業委員会の担当委員の所蔵リストを基に作成している。リストの更新は、年1回であり、JHLA 会員であればホームページからダウンロードが可能である。この参考図書リストの大きな特徴は、対象読者層の色分けである。書評や現物を参考に色別に表示している。患者図書室向けにどんな図書を揃えたらよいのか、どんな図書を選んだらよいのかなど、資料選択の判断材料として利用可能である。参考図書リストの選定基準(単行書、事典・辞書、シリーズもの、診療ガイドライン)は以下のとおりである。

- ①発行年が5年以内のもの
- ②事典・辞書、診療ガイドラインは5年以前のもので、新版が出るまで収載する
- ③出版社は、基本的に医学関係出版社とする
- ④医学・医療図書を基本とする
- ⑤ISBNは13桁 CiNii Books に準拠
- ⑥分類はNLMC分類、小分類(内容)はCiNii Booksを参考にして付与
- ⑦単行書と事典・辞書は、シリーズと重複しない
- ⑧価格は税抜きとする

#### 4) 患者図書室利用案内・広報誌紹介

各図書室で作成している利用案内(図4)と広報誌(図5)をJHLA ホームページに掲載している。これらは、作成していない施設も多いため参考にさせていただきたい。利用案内や広報誌は、年3回ほど新たな資料を紹介し、バックナンバーもまとめて掲載している。

鳥取市立病院 患者図書室 /2015年7月更新



**利用案内名称**

「患者様用図書のご案内」  
作成日: 2015年 5月

**利用案内詳細**

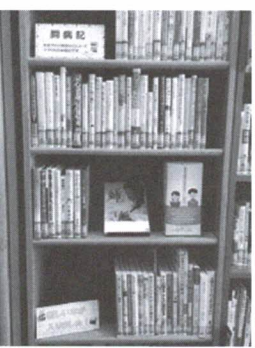
- 配布・設置場所  
患者様用図書室、1階総合受付、各病棟デイルーム、鳥取市立中央図書館、鳥取県立図書館
- 発行部数  
500部
- 掲示サイズ  
A4三つ折り
- 初版発行年  
2015年
- 編集・発行  
病院図書室担当者

**担当者からのひとこと**


手に取りやすいようA4三つ折りサイズにしています。  
病院に図書室があることはもちろん、鳥取市立図書館の一サービス窓口としても機能していることを知っていただけるような内容で作成しました。  
また、来院される患者様・ご家族だけでなく、広く市民の方々にも知っていただけるよう、公共図書館にも設置していただいています。

こちらからお読みください

PDF 版 [鳥取市立病院患者様用図書室のご案内\(PDF:1.56MB\)](#)



設置の様子①  
患者様用図書室内  
読病記・新着図書コーナー



設置の様子②  
鳥取市立中央図書館  
医療健康情報コーナー

図4 利用案内の紹介(鳥取市立病院 患者図書室)





設置の様子

広報誌(紙) 名称

「ぬくた〜ららら通信」  
発行：2014年12月

広報誌(紙) 詳細

- 編集・発行  
病院図書室担当者
- 配布・設置場所  
患者図書室、外来、病棟など
- 発行部数  
150部程度
- 発行頻度  
年6回(隔月)
- サイズ  
B4両面
- 初版発行年  
2013年
- ホームページ掲載  
あり
- 作成協力  
患者図書室部会委員、総務課

担当者からのひとこと

患者図書室通信では、病気や検査、薬などについて、患者図書室部会の委員である医師やコ・メディカルスタッフにわかりやすく解説して頂く「学ぼうシリーズ」を掲載し、健康づくりに参考にして頂けるような内容をお伝えしていきたいと考えています。  
また、患者図書室運営スタッフのおすすめ図書なども紹介しています。

こちらからお読みください

図5 広報誌の紹介 (県立多治見病院)

5) 問い合わせについての回答など

ホームページより寄せられた質問には、委員会で検討後、返答している。

これまでの問い合わせ内容は、受付総件数 63 件。そのうち、会員は 26 件、非会員は 37 件である。当初はマニュアル購入についての問い合わせが多かったが、問い合わせは多岐にわたっている。特に、選書についての問い合わせが多く、開設時に何をそろえれば

よいのか、年数を経ての蔵書の見直しについて、絵本はどのように選べばよいのか、委員会で毎年更新している参考図書リストについてなどがある。

## 7. 今後の活動予定

JHLA としては、現状調査をはじめ、患者図書室紹介の更新や参考図書リストの改訂を継続的に行なっていく。また、患者医療図書サービスについては、他団体と連携を取りながら、より多くの事例を共有できるような支援を行なっていきたい。

## 文献

- 1) 大沼由紀子, 有田由美子, 吉富まち子, 篠原寿美江. 病院図書室担当者として患者に対する文献情報・図書サービスへのかかわり方について. ほすぴたる らいぶらりあん 2002:27 (2);136-141.
- 2) 大沼由紀子, 有田由美子, 吉富まち子, 篠原寿美江. 病院図書室担当者として患者に対する文献情報・図書サービスへのかかわり方について (第2報). ほすぴたる らいぶらりあん 2003: 28 (2); 123-127.
- 3) 篠原寿美江 (川崎市立川崎病院), 有田由美子, 吉富まち子, 大沼由紀子. 「患者医療図書サービス (デスクマニュアルシリーズ)」の紹介. ほすぴたる らいぶらりあん 2004 : 29 (3); 171-172.
- 4) 吉富まち子, 長井律子, 吉田奈穂子, 真下美津子, 有田由美子, 患者医療図書サービス支援事業委員会. 患者医療図書サービス支援事業報告. ほすぴたる らいぶらりあん 2006: 31 (1); 25-27.
- 5) 患者医療図書サービス支援事業委員会. 患者医療図書サービス支援事業「患者医療図書サービス」現状調査報告. ほすぴたる らいぶらりあん 2005: 30 (3・4) ; 213-217.
- 6) 患者医療図書サービス支援事業委員会. 「第2回患者医療図書サービスアンケート」報告. ほすぴたる らいぶらりあん 2011: 36 (3); 148-150.
- 7) 患者医療図書サービス支援事業委員会. 「患者図書室紹介集」作成経過報告. ほすぴたる らいぶらりあん 2008: 33 (1); 30-32.

## <講演会報告>

# 患者図書室の歩み — 患者図書室の20年間と残された課題 —

健康情報棚プロジェクト代表

石井保志

### 1. はじめに

この20年間、患者図書室が着実に前進していく様子に刺激を受け、私自身はその進歩を何よりの楽しみにしていた。今般、患者図書室に関わってこられた団体が一堂に会し、立ち止まって振り返る機会を得られた意義は大きい。この機会に、私見であるが患者図書室の歩みを述べ、健康情報棚プロジェクトと患者図書室の関係を報告させていただく。



### 2. 患者図書サービス事始め

患者図書室は、患者・家族の方への情報提供ステーション、自己学習施設としての役割を担うものといえる。患者図書室の主目的は、入院患者やご家族に対して次の2つに大別される。一つ目は、教養書・娯楽書を備え、軽読書的なもので入院生活に潤いや癒しを提供するため。二つ目は、医療情報を提供し治療法の選択や意思決定を支援することである。日本における患者図書室は、『特殊図書館』竹林熊彦編著（1955年）の文献をはじめ、『患者と図書館』菊池佑・菅原勲編著（1983年）でかなり早い時期から必要性が叫ばれていた。実践では病院ボランティアによる図書室運営や、公共図書館のアウトリーチサービスによる事例は見られたものの、社会的に大きく注目されることはなかった。また、日本図書館協会では長い期間、病院へのサービスは“障害者サービス委員会”の所掌であった。図書館の世界では、病院への図書サービスは1994年以前にはマイノリティへのサービスに位置付けられていた。

### 3. 全国患者図書サービス連絡会

1994年に全国患者図書サービス連絡会が発足し、患者図書室で医療情報サービスの取り組みが始まると、「医療情報」を扱うことに対して批判も見られた。しかし、先達の努力もあり、徐々に医療情報を扱う「患者図書室」が図書館や病院でも認識されて来た。2000年前後には患者図書室の医療情報サービスは、医療を取り巻く環境や患者の価値観の変化により、必要性が後押しされた。実践では京都南病院図書室、東京女子医科大学「からだ情報館」の両図書室から発信された情報は、日本の患者図書室の「医療情報サービス」の認知度を高めた。この頃、図書館法に依拠しない患者図書室では相談機能の付与など新たな形態も根付き始めている。

#### 4. 患者図書室の課題

このような中、患者図書室で20年間進捗がみられない課題が取り残されている。「どんな資料を提供するのか」、「患者・家族の当事者のニーズは何か」などである。市民研究グループ「健康情報棚プロジェクト」発足のきっかけに、患者図書室で取り組みが充分でなかった課題へのチャレンジであった。患者図書サービスは20年経過しても選書、ニーズの把握、情報提供方法の3つは現在でも大きな課題として、まだ方向性が定まっているとは言えない。患者図書室にとり、この3つの課題は図書館員だけではなく、医療者や当事者などステークホルダーの協働により取り組む必要があるだろう。進歩を続ける患者図書室には、残された課題以上に大きな伸びしろが残されている。小さな図書室空間には、多くのチャンスや社会貢献の種が潜んでいるのである。

## <講演会報告>

# 「全国患者図書サービス連絡会パネル講演会」報告

## — 持続可能な活動を模索して —

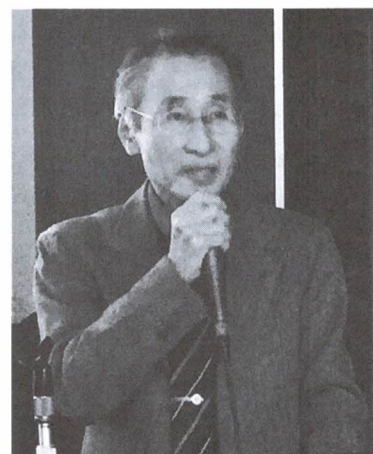
全国患者図書サービス連絡会

磯野 威

### 1. はじめに

本日（2019年12月15日）のパネル講演会では、「全国患者図書サービス連絡会」（以下、当会）の直面している課題を踏まえ、次の4点で一緒に検討を進めてみたい。

1. 関連する諸団体との連携協力（Collaboration）は可能か
2. 任意団体である当会の活動は持続可能か
3. 関連諸団体と共通する目標（理念）は何か
4. 目標実現のロードマップはどのように可能か



### 2. 25年の経過と現況

当会は、入院患者、地域住民への健康図書の提供などの患者図書サービスを先行して進めていた奈良岡功氏（自治医科大学）、山室真知子氏（京都南病院）らを中心に1994年（平成6年）に設立された。その背景には1980年代（昭和50年代）の菊池佑氏らによる同種のサービスの海外事情報告、さらには米国における消費者健康情報（Consumer Health Information）の動きなどがある。

当会の設立趣旨では、当時の状況を踏まえ、以下の機能を掲げて現在に至っている。

- ① ネットワーク機能として、点在する類似組織の連携基盤（会員化）の取り組み
- ② 情報の共有化として「会報」（当初は4号/年、現在は2号/年）を発行し、それぞれの活動内容の共有化
- ③ 研修機能としては、病院内でのサービスを進めるために、院内感染などの危惧への科学的な検証をはじめ、浮き上がってくる諸問題への対応上、必要と考えられる研修会、講演会を公開で行う
- ④ コンサルテーション機能として、同様のサービスを進めたい、あるいは進めている個人や団体からの相談、問い合わせに対応する

また、当会の守備範囲としては以下を想定していた。

- a. 成人入院患者への一般書の提供サービス（主にボランティアが主体）
- b. 小児病棟の患児への「読み聞かせ」「パネルシアター」などのサービス
- c. 公共図書館による病院などへの配本サービス（千葉県立中央図書館など）
- d. 医学健康情報の提供サービス（京都南病院など）

活動開始後の25年間に、当会で行ってきた会報、講演会（研修会）から現在に至る主

要なキーワードを見ると、「読書療法」「読み聞かせ」「選書」「ベッドサイド・サービス」「ボランティア活動」「インフォームド・コンセント」「ニューヨーク公共図書館」「厚生労働科学研究事業」「国立ライフサイエンス情報センター」「図書館連携」「医療機能評価」「闘病記」「原発事故」「図書館員の倫理綱領」「エンベディッド・ライブラリアン」「バリアフリー」など、多岐にわたってきたことがわかる。

この間、国内外での実践事例が多く展開されてきた。また、東京女子医科大学、東邦大学などの一般市民をも対象とした医学健康情報の提供サービスが始まり、さらに公共図書館と協力を進める医学系図書館が中心となり地域連携の動きも現れてきた。特に公共図書館では、東京都立中央図書館、鳥取県立図書館などの先行事例は、その影響を広く推し進めてきている。

患者図書サービス活動をすすめてきた当会の現状は次の通りである。

- ・ 講演会の年2回開催。
- ・ 出版物として「会報」を年2号刊行（2018年度までは年4号）している。
- ・ 「患者さんへの図書サービス・ハンドブック」1994の刊行
- ・ 会員数は2019年11月末現在で約60名、年会費4,000円となっている。
- ・ 役員は10名である。

### 3. これからの可能性

本日のパネル講演会で課題の1番目とした「関連諸団体との連携協力は可能か」については、本日の企画に関連する諸団体が賛同し、ご協力いただけたことで可能と考えられる。

2番目の「当会の活動は持続可能か」については、役員体制の高齢化という現在の日本社会が直面する課題をまともに反映し、若手役員の支援・協力が必須の現状である。この課題は他の分野の諸活動でも共通しているのではなかろうか。

3番目の「関連諸団体と共通する目標(理念)は何か」については「医療(医学)健康情報」の一般市民の利用を保障する公的な支援体制の確立にあるのではなかろうか。この点の意見交換が今回だけでは十分に叶わなかった感があるが、今後続く課題となれば幸いである。これは4番目の課題とした「目標実現のロードマップはどのように可能か」への具体的な一歩となれば、本パネル講演会を企画した当会の一員として満足な結果といえる。

今後についてあえて言及すれば、日常の現場でできることを積み上げつづけていくことであり、これが手ごたえを持ちつづける唯一の実践手法ではないかと思われる。図書館が成長する有機体である限り、そこでは基本(Librarianship)があって定型はない。

さらに、一個人やひとつの組織では突破できない様々な壁に対しては、協調できる事業目標を当事者間で十分に意見交換し現状調査を重ねながら、たとえ時間がかかっても「実現可能なプラン(戦略)」を持ちうるか、に懸かっているのではなかろうか。

## <参加記>

### 「全国患者図書サービス連絡会」講演会参加記

東京医科大学図書館

高畑 亜紗美

2019年12月15日（日）、東邦大学大森キャンパスにて開催された「患者図書サービスの現在と将来：20年間の振り返りと展望」に参加させていただいたのでご報告します。

日本図書館協会健康情報委員会、日本医学図書館協会医療・健康情報委員会、日本病院ライブラリー協会、健康情報棚プロジェクト、全国患者図書サービス連絡会の5団体が集まり活動歴と今後についてご講演いただきました。

内容は第1部「患者図書サービスの歴史」、第2部「各団体の活動歴と今後」、第3部「パネルディスカッション『患者図書サービスの将来』」の3部構成でした。

第1部は、患者図書室の歴史として、中世から現代までの流れを総括しました。中世期は宗教的な意味合いから、癒しや治療としての読書だったものが、徐々に患者の知る権利を保障するための情報源提供としての役割に移行していき、インフォームド・コンセントとして患者の自己決定を支援する情報提供が求められ、病院機能評価などの法的、社会的制度が追い風になり、2000年代初頭から各地で患者図書室が増加していったことがよく分かりました。現在はガイドライン作成にも患者会が参加するようになり、Minds「診療ガイドライン作成マニュアル」にもステークホルダーの一員として患者・市民の参加が組み込まれているということは驚きでした。

第2部では、5団体から各団体の活動歴と今後の展望をお聞きしました。日本図書館協会健康情報委員会は主に公共図書館での働きで、各地公共図書館から研修会の依頼を受け、また研修を行える人材の育成も行っているそうです。

日本医学図書館協会では、健康情報サービス研修WGを2012年から医療・健康情報委員会と改め、公共図書館の健康情報サービス支援から患者図書室への支援へ強化し、事前に訪問時のチェックリストなどを作成し、患者図書室のサービスの標準化、安定化を図るための活動をされています。今後は実態調査などを行う予定とのことでした。

日本病院ライブラリー協会では、患者医療図書サービス支援事業として全国の患者図書室の現状調査、ホームページでの患者図書室紹介、利用案内や選書リストの公開などを行っています。患者図書室は移り変わりが激しく、実態を把握することと、新規で開室する図書館へのマニュアルの提供などを行って支援しているそうです。

健康情報棚プロジェクトは、闘病記に特化した患者図書サービスを行っています。闘病記はタイトルからでは辿り着くことが困難で、また何について書かれているものかわかりづらいなど利用が難しいので、どのような形での提供が望ましいか、また利用者への届け方の事例などが紹介されました。ライフマップを作成し、当事者または患者のその時々ニーズを整理し、一時では終わらず長い目で情報を提供する必要性を感じました。

最後に全国患者図書サービス連絡会からは、今回の5団体の連携（協働）を目標に、関連団体が協力するために共通する目標を定めることは可能か、どのようなロードマップが計画可能かという問題提起がなされました。今回5団体が集まったことで、第一段階はクリアしたので、各団体で持っている情報やノウハウを共有することでより発展的な活動ができるのではと感じました。

第3部のパネルディスカッションでは、参加者からの質疑応答が行われました。新たに設置予定の患者図書館で、主に総合病院では、すべての診療科を網羅する必要があり、どのような選書基準で収書するべきかとの戸惑いがあることがわかり、当館でも同様のことがあったので共感する部分でした。実際には設置母体の特色によるものが大きく、あるいは先行図書館の蔵書リストが参考になるため、蔵書リストを集約して公開することの必要性を感じました。連携のための今後の目標として、米国の図書館の例があげられ、国から地方自治体への連携が整備され、米国の図書館法のようなものが日本にも必要で、患者への情報提供の重要性について厚生労働省などへ理解を求める必要があると思います。現場レベルと制度的な面へのアプローチを団体が協力して行っていただきたいと思いました。最後に診療報酬改定で2020年からアドバンスケア・プランニング、患者の意思決定支援がポイントとなることが、設置母体への理解を求めるうえで今後のキーになるのではということでした。磯野さんが仰った継続性の維持は最も重要で、担当者が変わっても変わらず続けることが大切という言葉が強く心に残りました。

今回このような会に参加し、各団体が活動されてきた内容を聞き、今後の自館の運営の参考になることが多々あり、非常に心強く感じました。また後進の参考になるよう安定した維持を継続するべく努力しようと改めて思うことができました。



## <患者図書室訪問>

# 新潟県立がんセンター「からだのとしょかん」と「あかね文庫」

青梅市立総合病院図書室

家田 史子

「さあ、着いた。とうとう来ちゃいましたよ。」ホームに降り立つと、すーっと新潟の風に迎えられました。凜とした冷たさのお出迎えでした。市内バスで最寄りの停留所から数分で、あの有名な「新潟県立がんセンター」に到着です。ホームページ等でご存じの正面玄関を入ると、エスカレーター横の表示板に「からだのとしょかん」の文字です。「はい！二階ですね。」と、心の中で相槌です。二階に運ばれると、そこは、ちょうど正面玄関のエントランスが一望できる場所でした。「からだのとしょかん」到着です。入口のすぐ横にエレベーターがありました。車椅子にもやさしいです。室内には、ボランティアさんの温かい笑顔がありました。入口を入ると左側には、医学書が並んでいました。ちょうど患者さんがおひとり椅子に座られて、書棚をみつめていらっしゃいました。ボランティアさんは、その患者さんの問いかけに頷き、何か話されていました。私は、右側にある天井までぎっしり文庫本がつまっている「あかね文庫」を見あげました。文庫本の貫禄に圧倒されていると、有田さんが来られました。何年ぶりかにお会いしました。感激です。スーツ姿ではない白衣姿にキャリアと生き生きとした空気を感じました。仕事場である図書室に案内され、「からだのとしょかん」の入り口に並べてあるパンフレットをちょい見して、向かいます。振り返ると、決してキラキラしてはいないがしっかりと患者図書室を牽引してきた「からだのとしょかん」の景色がありました。

お時間を取らせないようにと事前に質問事項を送らせていただいたので、その質問を基にお話をさせていただきました。会話内容の一部を記します。



質問：その1：広報誌『からだのとしょかん』、『おひさまだより』の編集・発行をどのような体制で継続してこられたのでしょうか？

『からだのとしょかん』は、年に5～6回発行します。年度当初に、サポートケア委員会からだとしょかんグループが内容と執筆部署を決め、依頼します。そして、各締め切り日前後に、図書室司書へメール添付で投稿してもらいます。編集したら、執筆者とサポートケア委員会からだのとしょかんグループに回覧し、追加修正などチェックし、完了後、院内各部署に配布・掲示し、ホームページにも掲載します。

『おひさまだより』は、年に2～3回発行します。図書室司書が「おひさまだより」絵

本アンケートを職員・実習生・ボランティア・患児家族などにします。そして、アンケートの回答の中から、あかね文庫お話し会代表の方が選び、絵本と回答の一部にあらすじを加え、図書室司書が編集し紹介します。

『小さなおともだち』というたよりがあります。とてもいいんです。心が温まるものが多くぐっときます。ボランティアさんの活動日誌の中からエピソードを書き出します。絵本の表紙など著作権を確認して図書室司書が編集します。ボランティアさんが、活動日に小児科病棟の医師・看護師・患者・家族に配布します。図書室司書は、ホームページに掲載します。

**質問：その2：ボランティアさんとの関わり方について教えてください。**

院内に、ボランティア募集やボランティア活動を支援・運営するボランティア運営部会があります。図書室司書は、日誌やボランティアノートと鍵の受け取りの際、活動の様子を聞いたり、ボランティアさんとおしゃべりをします。曜日ごとにボランティアさんが替わるので、ボランティアさん同士のコミュニケーションのために全体会としての院内研修会があります。年2回ですが、図書室司書も参加します。また、他に独自の研修も行います。(参照：県立がんセンター新潟病院医誌 54 巻 1 号 がんセンター患者図書室での傾聴 — 「からだのとしよかんボランティア研修会」から—)

**質問：その3：患者図書室を今後続けていくことについて懸念を覚えることはありますか？**

もし、あるとしたらどのような事でしょうか？

利用者が年々減少しています。パソコンやスマートフォンの影響もありますが、以前アンケートをした際に、利用しない理由として、「知らなかった」が50%でした。広報の重要性を感じ今まで行っている病院作成のしおりやからだのとしよかん通信の他に、案内板や分野別ブックリスト「からだのとしよかんの本」など作成し、また、論文・口頭発表、新聞などでアピールしていますが、どのようなものが効果的なかわからないでいます。教えていただきたいです。

また、立ち上げた本人の退職後、どのように取り組んでくれるか心配です。そうならないよう、組織化し取り組み、病院にとっても患者・家族にとってもなくてはならない存在になる必要があると思いますが、いかがでしょうか？他院の状況も知りたいですね。

**質問：その4：サポートケア委員会について教えてください。**

時代とともに名称が変わりました。最初は、インフォームド・コンセント委員会でした。そして、ターミナルケア委員会となり、現在のサポートケア委員会なのです。構成は、医局(3～4人、院長も含む)、病棟看護師(全病棟から)、薬剤師、臨床心理士、ケースワーカー、緩和ケアセンター、図書室司書などです。がん専門病院としての機能にふさわしい患者支援体制の構築と、患者を身体的・精神的・社会的に支援する事業・研究等の実践により、がん患者が抱える様々なつらさを緩和することを目的として活動しています。緩和

研修会などの職員研修活動や退院・在宅療養支援などと共に、病気に対する情報提供活動も含まれ、その運営は、図書室司書が責任者となり、資料の検索・貸し出しなどにより患者への情報提供を行うこととなっています。

質問：その5：公共図書館との連携について教えてください。

『あかね文庫』では、新潟市立図書館から、払い出し雑誌をいただいています。『からだのとしょかん』では、新潟県立図書館から、がん関係・医療関係などの広報誌についての問い合わせがあったり、相談支援センターの人材を紹介したりしました。また、公共図書館向けの研究集会にて、事例報告を行いました。

連携するのでしたら、選書リストや広報誌のやりとり、病院の相談支援センターからのパンフレットの紹介など、負担のないところからできたらいいと思います。

質問：その6：市民の医療情報ニーズや情報リテラシーは、ここ20年くらいの間に大きく変化していると思いますが、変わったこと、変わってないことについて何かお感じになることはありますか？

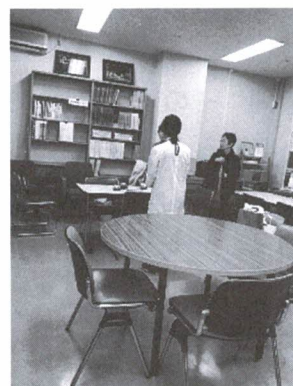
今は、ネットにより自身で情報が得られるようになったので、室内に設置してあるパソコンの利用もかなり少なくなっています。しかし、パンフレットの需要は多いです。分かりやすくまとめてあるのが良いと思います。逆に、溢れている情報に対してのリテラシーについて、知らない人が多いと言われており、まず、当院のボランティアさんには、ヘルスリテラシーについての掲載があったら、よく読んで理解してほしいと紹介しています。例えば、下記の文献です。

- ・中山和弘, ヘルスリテラシー入門, 栄養と料理 2018;84 (10) :9-21,
- ・小島正美, 始めようファクトチェック, 栄養と料理 2018;84 (10) :81-86,

質問：その7：県立がんセンター新潟病院医誌 55 巻 2 号アンケート報告後の活動について教えてください。

『からだのとしょかん』のホームページのリンク集に、「補完代替医療」を追加しました。エスカレーター横に、案内板を設置し、場所を分かりやすくしました。そして、前述したように、『からだのとしょかんの本』というブックリストを作成し、患者さんへの書誌情報のアドバイスの一助となっています。“読者の声を聴く”や“常に広報すること”を意識していかなければならないと思っています。

話は尽きませんでした。あっという間の2時間でした。もう一度、『からだのとしょかん』に戻り、写真を撮りました。その時、パジャマ姿の男性が、紙袋に数冊の文庫本をしまい、ボランティアさんと笑顔で言葉を交わされていました。ちょうど、3時になりました。ボランティアさんは、ひとしきりの片づけ



をされ、鍵を有田さんに渡されていました。そのしぐさに、お互いの繋がりを感しました。利用者の計測できる数より、利用者の量れない満足感。そんな役目を大切にしているように思えました。今来られた患者さんが笑顔で出ていかれるという温かさです。

3時で外来用のエスカレーターが停止しました。今までの喧騒が収まった正面玄関を通り、充実感をお土産にして帰路に就きました。



## 全国患者図書サービス連絡会会報投稿規定

1. 本会会員（購読会員を含む）は誰でも投稿できます。
2. 本会報は、患者図書サービスをめぐるいろいろな話題や問題、そしてこれらと関係する論文、報告、資料などを掲載します。
3. 投稿原稿の採否は、役員会で決定します。
4. 投稿原稿の長さは問いません。
5. 投稿原稿の執筆・提出要領は次の通りです。
  - ① 原則としてWord形式で作成してください。
  - ② 表紙頁には標題、著者名、所属を明記し、更に、主執筆者の所属、郵便番号と住所、電話番号、FAX 番号、メールアドレス等を明記してください。
  - ③ 外国人名は原語表記または、適当な日本語表現で表記してください。
  - ④ 原稿に付随する図や、表、写真は図1、表1、写真1などの番号を付け、本文とは別に添付し、本文原稿の欄外にそれぞれの挿入希望位置を指定してください。またそれらは、スキャナを使ってパソコンに取り込んで印刷しますので、なるべく鮮明なものをつけてください。原稿も含め、投稿されたものは原則的にお返ししませんので、貴重な写真などはなるべくコピーをとってください。どうしても返却を希望される場合は、その旨お伝えください。
  - ⑤ 参考文献の記載様式：
    - i) 記載順序は出処順としてください。
    - ii) 逐次刊行物：著者、論文名、誌名、出版年；巻数（号数）：開始頁—最終頁。
    - iii) 単行本：著者、章の見出し、編者名、書名、版表示、（シリーズ名；シリーズ番号）、出版地；出版者；出版年、開始頁—最終頁。
6. 著作権は、全国患者図書サービス連絡会に帰属します。転載などを希望する場合は本会事務局にお問い合わせください。
7. 原稿送付先：info@kanjatosho.jp

(2017.11.18 改訂)

### [ 編集後記 ]

25 巻 2 号（通巻 84 号）をお届けします。

巻頭に、ベテランボランティアの方から投稿を頂きました。現役時代の経験を活かして、病院の中で、いきいきと柔軟に活動されているご様子が目にうかびます。

連載記事「患者図書室訪問」の 3 回目を掲載しました。日本の患者図書室のパイオニアとも言うべき司書にお会いしてお話を伺うことができ、執筆者、同行者とも、元気をもらって帰ってきました。

そして、2019年12月に開催したパネル講演会の報告を掲載しました。講演者および参加者の皆様有難うございました。(編集子)



電子ジャーナルホスティングサイト

# PierOnline ピアオンライン

PierOnlineは国内の学術出版社が発行する医学・薬学・看護系の学術誌を電子ジャーナルとして提供するホスティングサイトです。ご利用は1論文からPayPerView購入が可能です。

## メディカ出版 25タイトルを1論文単位でPayPerView購入できます！



- ・インфекションコントロール
- ・Emer-Log
- ・オペナーシング
- ・眼科グラフィック
- ・眼科ケア
- ・サーキュレーション・アップ・トゥ・デート
- ・みんなの呼吸器Respica
- ・スマートナース
- ・整形外科サージカルテクニック
- ・産業保健と看護
- ・消化器外科ナーシング
- ・ナーシングビジネス
- ・整形外科看護
- ・ニュートリションケア
- ・赤ちゃんを守る医療者の専門誌 with NEO
- ・透析ケア
- ・ハートナーシング
- ・糖尿病ケア
- ・バスキュラー・ラボ
- ・ブレインナーシング
- ・YORI-SOUがんナーシング
- ・脳神経外科速報
- ・ペリネイタルケア
- ・リハビリナース
- ・泌尿器Care&Cure Uro-Lo

### その他、PierOnlineには価値ある雑誌を多数収録！

- ▶ 癌と化学療法社「癌と化学療法」 ▶ 最新医学社「最新医学」
- ▶ 南江堂（南江堂オンラインJournal）「外科」「内科」「胸部外科」「整形外科」「別冊整形外科」「がん看護」 ▶ メディカルレビュー社「PharmaMedica」 ▶ 医歯薬出版「医学のあゆみ」
- ▶ ライフサイエンス出版「薬理と治療」「TherapeuticResearch」 …等

- \*ご利用の多い雑誌を1誌単位で年間購読も可能です。
- \*メディカ出版全誌パッケージのお得な価格もご用意しております。
- \*本文を対象とした全文検索が可能です。

**SUNMEDIA 株式会社サンメディア e-Port**

**e-mail : e-port@sunmedia.co.jp**

本社 〒164-0012東京都中野区本町 3-10-3 PORTビル  
Tel : 03-3299-1575 Fax : 03-3374-1410

大阪オフィス 〒550-0003大阪市西区京町堀 1-3-3 肥後橋パークビル 4F  
Tel : 06-6444-7720 Fax : 06-6444-7730



国内最大級の医学文献情報データベース

# 医中誌 Web Ver.5

デモ版 <https://demo.jamas.or.jp/>

## Database Interface

国内発行の医学・歯学・薬学・看護学等の定期刊物のべ約7,000誌から収集された膨大な医学文献情報をインターネットで検索できます。検索対象は1959年から最新データまで約1,300万件。

## Link

医中誌Webから電子ジャーナルや全文PDF等のフルテキストサービスにリンクしている件数は370万件、うち130万件は無料で公開されています(2019年7月現在)。また、図書館システムとのリンクも行えます。

## Customize

大学・病院・企業・公共図書館などそれぞれの環境に応じたご利用機関ごとのカスタマイズ、「My医中誌」による個人ごとのカスタマイズが行えます。

### 法人向け「医中誌 Web」

1年間の固定料金制。同時アクセス数2で250,000円(税抜)～  
同時アクセス数上限の無いプランもございます。

### 個人向け「医中誌 パーソナル Web」

1ヶ月8時間利用で2,000円(税抜)～

特定非営利活動法人 **医学中央雑誌刊行会** <https://www.jamas.or.jp/>



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東2-5-18  
TEL : 03-3334-7625 FAX : 03-3335-3327 E-MAIL : info@jamas.or.jp



# UNIVERSAL THEATER

## 夢の ユニバーサル シアター

平塚千穂子



映画の世界に新たな光をくれた  
この“光”がたくさんの人々の  
元にとどきますように

映画監督 河瀬直美

A 5判・248ページ 定価：本体2,000円+税  
ISBN：978-4-902666-37-3

## 夢のユニバーサルシアター

平塚千穂子 著

目が見えなくても映画を楽しめるツール「音声ガイド」。  
音声ガイドの制作者であり、日本初のユニバーサルシアター  
「シネマ・チュプキ・タバタ」の創設者でもある著者・平塚千穂子が、  
さまざまな壁を乗り越えてたどり着いた、誰もが楽しめる新しい映  
画鑑賞の形、映画館のあり方について提案します。

### もくじ

#### CHAPTER 1

シネマ・チュプキ・タバタができるまで

#### CHAPTER 2

制作者とモニターが語る音声ガイド

#### CHAPTER 3

音声ガイドで読む映画『ローマの休日』とガイドづくりのポイント

有限会社 読書工房

〒171-0031 東京都豊島区目白3-13-18 ウイング目白102

電話：03-5988-9160 ファックス：03-5988-9161

Eメール：info@d-kobo.jp <https://www.d-kobo.jp/>

全国患者図書サービス連絡会会報

ISSN 1344-2937

第25巻 第2号 (通巻84号) 2019年12月30日発行

発行所：全国患者図書サービス連絡会 (<http://kanjatosho.jp/>)

株式会社 北杜社

〒212-0033 川崎市幸区東小倉8-15

印刷所：株式会社 中島印刷所

〒232-0026 横浜市南区二葉町4-39